

菅原道真の表現について

— 卷四・「菊」を中心に —

一

菅原道真の「菊」を詠んだ詩を取り上げて検討して行く。何故「菊」なのか、と言うと、それはこの景物が、純粹に外来のもの^{注1}であり、その点で中国の詩文表現の典拠、出典と分ち難く絡み合っているからだ。道真における「菊」の重要性は、夙に幸田露伴が触れている。そこでは道真の「菊」に対する好尚が説かれている。また本間洋一氏は露伴の論を出発点としつつ、道真の「菊」の叙述の有り様の検討を通じて、道真の表現の独自性とその志向する所を証し立てている。本稿では、そうした研究史を踏まえつつ、別の角度から道真における「菊」の表現を見て行きたい。それは道真の「菊」とは、その景物をどのよう^{注2}に受容しているかで、道真自身の表現の質をあきらかにする、言わば指標となり得るものではないかという見通しである。

ただ今回は、それらの「菊」を詠じた詩の中から、特に、巻四を中心とした用例を見て行くことにする。それはその時期が、道真にとって不本意であった讃岐守という一地方官に甘んじた時期と重なっており、そのため道真の心情表現の一層の表出を

見て取ることができると思うからだ。

二

道真の「菊」の表現の特徴は、やはり九月九日の重陽節と結びついた叙述の多さが指摘できる。これには莫を拝頭にさすものとか、菊酒なども含まれよう。そうだとすると、この公の年中行事、つまり外発的な契機に支えられた「菊」という図式が見て取れることになる。ただしそうした中にあっても、巻四・卷五では、自己の過往の思い出としての宮中を詠じた詩、つまり内面からの歌が大半であることもまた見逃せない。

それでは、前者の例として巻一「九日侍^{注3}宴、賦^{注4}山人獻^{注5}茶莫杖^{注6}、應^{注7}製」から検討する。

九日侍^{注3}宴、賦^{注4}山人獻^{注5}茶莫杖^{注6}、應^{注7}製

莫杖肩昇入^{注8}九重^{注9}、煙霞莫^{注10}笑至尊供

南山出處荷衣壞、北闕來時菊酒逢

靈壽應^{注11}慙恩賜^{注12}孔、葛陂欲^{注13}謝化爲^{注14}龍

插^{注15}頭繫^{注16}臂皆無力、願助^{注17}仙行^{注18}一趁^{注19}赤松^{注20}

これは全体として「芸文類聚」^{注21}一歳時下、九月九日」に載せる

佐藤 信 一

「續齋諧記」の、以下の叙述に拠るものだろう。

汝南桓景、随_レ費長房_一遊學累_レ年、長房謂_レ之日、九月九日汝家當_レ有_二災厄_一、急宣去、令_下家人各作_二絳囊_一、盛_二茱萸_一以繫_レ臂、登_レ高飲_中菊酒_上、此禍可_レ消、景如_レ言、舉_レ家登_レ山、夕還_レ家、見_二鷄狗牛羊_一、一時暴死_一、長房聞_レ之日、代_レ之矣、今世人每_レ至_二九日_一、登_二山臨_レ水飲_二菊酒_一、婦人帶_二茱萸囊_一是也

といった記事だ。ただここでも道真が、この出典に依拠しつつも、大幅な取捨選択を行なっていることに注目すべきである。

「續齋諧記」では、禍いを逃れたという奇瑞を説くのみで文脈であったのに対して、この詩の尾聯では、「插_レ頭繫臂皆無_レ力願助_二仙行_一趁_二赤松_一」と、そうした奇瑞も「皆無_レ力」、力無しとされるのだ。

さらに「赤松」、赤松子が導入されるのだが、これは「史記」「留侯世家」に「……願_二奔_二人間事_一、欲_下從_二赤松子_一遊_上耳。乃學_二辟_二穀道引輕_一身_一（願はくは人間の事を棄て、赤松子に従ひて遊ばんと欲するのみ」と。乃ち穀を辟け道引し身を軽くするを學ぶ。」とあるのが参考になる。この主人公の留公張良も、若くして通りすがりの老人に兵書を授けられ、漢に仕えて大功のあつた人物であるが、神仙への志向は覆うべくもないつまり、この文脈を借りて、道真は、人間、俗世間のことを捨てるといふ方向に全体を纏め上げているのだ。

ところで、この詩では「菊」が「南山出處荷衣壞、北闕來時菊酒逢」と詠せられている。「菊」、「南山」とあることから、「采_レ籬下、悠然見_二南山_一」（菊を采る東籬の下、悠然として南山を見

る）」という陶潜の「飲酒七首」の第七首の文脈との拘わりを見て取ることも可能かもしれない。もちろんこの聯の「南山」とは「北闕」との対ででているのだし、「菊」も「荷」と番えられるものだから、そう一概には言いきれまいが、一つの可能性として指摘しておく。

ただ、むしろここで見るべきなのは、道真がこれら類書の記事を、徹底的にパロディーにしていることだと思ふ。それは冒頭の「萸杖肩昇入_二九重_一、煙霞莫_レ笑至尊供」から、看取できる。川口久雄氏の注釈の訳は、「仙人は茱萸の杖を肩にかついで内裏に入る。宮中に茱萸の杖を献ずるといふような俗人のまね事を仙人がするから、煙霞よ、笑うことなかれ」となっている。

「宮中に茱萸の杖を献ずる」ということが「俗人のまね事」と捉えられるわけだ。つまり、ここでは道真にとつても權威であつた筈の「宮中」の価値そのものが、否定されている。もしも「宮中」に価値があるのなら、そこに「茱萸の杖を献ずる」ことも「仙人」には賞讃されこそすれ、「笑」われる目には会わなかつたであらう。ここでは「宮中」の価値そのものが相対化されていると把握できるのである。

この詩では、「宴に侍し」、「制に応ず」詩でありながら、個々の文脈ではズレがあることが確認できよう。道真にあつては、このような場の制約を受けるに違いない詩の表現の中に於ても、いわば個人のためのみの脈絡があつたのだ。

三

それでは、今度は巻四の「九日偶吟」を見ることにする。

九日偶吟

客中三見菊花開 一 只有重陽每度來 一

今日低頭思昔日 一 紫宸殿下賜恩盃 一

これを初めとして、これから見て行く巻四の諸作品は道真が讃州客中の折の作である。表現を検討しておく。初句「客中三見菊花開」というのは、注釈で指摘されている通り、白居易「白氏文集」巻十七に収める「九日醉吟」の三・四句「一爲二州司馬、三見二歳重陽」とある表現に拠つたものだろう。ただ、この白居易の詩の他の部分に目を転じるとどうだろうか。

初二句には「有恨頭還白 無情菊自黃」と、悩む自己を「有恨」、自然の菊を「無情」と対比させている。また七・八句にある「身從漁父笑 一、門在雀羅張」も、「楚辭」「漁父辭」にのせる流離の屈原を嘲う漁父の故事と、「史記」「汲鄭伝」所載の没落した者の庭には雀があふれ、網で捕えるほどだったという二つの故事を踏まえつつ自己を嘲笑の対象として捉える苦衷を物語る。さらに一三・一四・一五・一六句では「奈老應無計 治愁或有方 無過學王績 唯以醉爲郷」と「老」はいかんとできないが、「愁」を忘れるなら、酒を嗜んで、斗酒学士と称された王績に習って、「醉」を「郷」にすればよいとされている。換言すれば、老いを止める手段はないが、憂いを忘れるのなら、酒酔があるとしている。つまりこの道真の「九日偶吟」とは、白居易の詩の一部を引用することで、救いのない苦悩を詠じた詩たり得るのである。道真を始めとする日本の漢詩人の引用は、断章取義とされ、引用された典拠の主題との拘わりよりも、表現のレベルで処理されることが多いようであるが、重ね合わせてみることで、もつと見えてくる部分もあるのではないだろうか。論を戻しておく、ここでは「客中三見菊花開」と、歳月の推移を象るもの、つまり季節の移ろいを示す景物として「菊」が用いられている。だが、それとともに次の句で「只有重陽每度來」と叙述されることによって、「重陽」という年中行事の時間までが表現に織り込まれていることに注目しておく。そうした、言ってみるならば自然の時間と人事の時間とが分ち難く絡まり合うことによつて、道真の詩の時空が紡ぎ出されていると言えないだろうか。

とここで次の句、「今日低頭思昔日」であるが、これと類似した表現として、李白「靜夜思」の後部「舉頭望山月 低頭思故郷」が想定できると思う。李白の「靜夜思」は、製作年代が不明である。ただ旅のもとに作られたものとされている。旅にあつての思いという点で、讃州に赴任していた道真の胸中と通じるものがある。李白の「低頭思故郷」とある「故郷」を、「昔日」に置き換えることによつて、道真は、自己の過去への望郷の思いにも似た執着を、叙述しているのである。そして結句、「紫宸殿下賜恩盃」と「昔日」の具体的内容を明らかにする。このように殿舎の名と、天皇から下賜された品物の名とを、詩に詠み込むことは、道真の後の作品にも見られる。「菅家後集」「九月十日」が、その典型と言えよう。そこには注は省いて本文のみを挙げると「去年今夜侍清涼 一 秋思詩篇獨斷賜 恩賜御衣今在此 捧持每日拜餘香」とある。「侍清涼」と過往のことを振り返り、「恩賜御衣」が現在手許にあることによつて過去の思い出が一層切実に象られるという

構造になっている。その現在と過去との關係を語るのに「九日偶吟」と「九月十日」で「紫宸」、また「清涼」と詠み込み「賜恩盃」、さらに「恩賜御衣」と叙述されていることとの脈絡が見て採れよう。

つまり道真是、類似した表現を繰り返して用いることで、叙述を組み立てているのだと思われる。しかも「九日偶吟」、「九月十日」の両者がともに秋を背景とする詩であることに注意しておくべきだろう。そのことは、前代の嵯峨朝の表現、具体的に言えば「経国集」巻一に載せる「重陽節神泉苑賦秋可哀」の一連の応製奉和の賦群の叙述に着想を得たものではないか。^{注13}もちろん「九日偶吟」にしても、「九月十日」にせよ、外部からの動機―應製・奉和など―ではなく、内発的な契機に支えられて詠じられたものである。だがそれにしても、作者と天皇との關係に対する作者、道真の思いがこめられていることには違いあるまい。このことは道真の内面が、そうした外部とのせめぎ合いに規制されたものであることを、何よりも勇弁に物語るものではないがろうか。そのことは、先程確認した「九日侍宴、賦山人賦「茱萸杖」、應製」と好対照を見せるものだ。そこでは公に託しきれない個、あるいは孤、の叫びを読み取ることができた。換言すれば、その頃にはまだ道真是、自らの矜持を頼むことが可能であった。汚れた社会から屹立しさえすればよかつたのである。この「九日偶吟」になると、社会から逸脱しきれない、孤、一人、に安住することのできない者の悲惨さが読み取れるのである。

四

さて、巻四で次に見て行く作品は「寄白菊四十韻」である。本文を引こう。

寄白菊四十韻

遠隔^二着波路^一 遥思^二白菊園^一

東京蝸舍宅 西向雀羅門

小墪斜當^レ戸 疎欄正逼^レ軒

無^レ池蓮本缺 有^レ畝竹遼繁

擬^レ擅^二孤叢美^一 先芸^二庶草蕃^一

苗從^二台嶺^一得 種在^二侍郎^一存

子爲^二吏部侍郎^一之日、天台明公、寄^二是花種^一。

下^レ手分移過 中心愛護敦

早春新^二膩葉^一 初夏細^二牙根^一

待^レ灌占^レ依^レ井 承^レ湯免^レ戴^レ盆

蕊期^レ揚^二酷烈^一 莖約^レ引^二嬋媛^一

爽籟吹^レ灰到 流年轉^レ殺奔

乍看^二珠顛拆^一 爭賞^二素葉翻^一

蟬翅迷^レ施^レ粉 蜂鑽鬧^レ著^レ痕

地疑^二星隕^一末 庭似^二雪封^一袁

紫襲衣藏^レ篋 香浮酒滿罇

仙家嫌^二葱圃^一 隱士厭^二桃源^一

笑殺陶元亮 浪資楚屈原

和^レ光宜^二月露^一 同^レ類是蘭蓀

色惜哀^二虛室^一 名後要^二盛昆^一

慙竿會獻^レ主 梅劍只貽^レ孫

任^レ老休^レ炊^レ桂 忘^レ憂倍^レ帶^レ萱

芬芳應^二佩服^一 貞潔欲^二攀援^一

四序環無^レ賜 千秋矢不^レ諼

生涯雖^二量測^一 祿命未^二平反^一

面目歡娛少 風塵悶亂煩

業拋^二羊柱筆^一 官建^二隼旗幡^一

失^レ道人皆議 安^レ身我獨論

雙龜收^二北闕^一 五馬屬^二南轅^一

文選云、別^二子雙龜^一、李氏謂、罷^二二官^一也。

余、及^レ爲^二刺史^一、解^二却兩印^一、故云也。

鬱鬱江雲臭 濛濛澗雨溫

行程過^二綠浦^一 逆旅臥^二青嶺^一

水國親賓絕 漁津商賈喧

一來疲^二涕泗^一 三度變^二寒暄^一

想^二像霜華發^一 悲^二傷晚節昏^一

含^レ情排^二客館^一 抱^レ影立^二荒村^一

恨望將^レ穿^レ眼 追尋且^レ送^レ魂

意驚由^二過雁^一 腸斷豈聞^レ猿

有^レ處堆^レ沙插 何人折^レ柳攀

自開還自落 誰見也誰言

暮景愁難^レ散 涼風恨易^レ吞

寄^レ詩花盛否 珍重可^レ知思

長いものなので、聯を適宜抜き出して論じる。ただこの詩では「菊」を表現することで、道真が何を語ろうとしていたのか

と明らかにすることが目標である。

最初の聯「遠隔^二着波路^一 遙思^二白菊園^一」に、「菊」の用例を見る。ここの「白菊園」とは、「着波路」、文字通り海に隔てられた、京都の、かつての道真の邸宅の庭に咲くものである。

その「菊」に対する道真の愛情と、さらに「菊」の美しさの表現の試行過程とも言うべきものが、以下叙述されて行く。「擬^レ擅^二孤叢美^一 先芸^二庶草蕃^一」(九・一〇句)と、「菊」を「孤」

でもって象り、「下^レ手分移遍 中心愛護敦」(一三・一四句)と、自らの手で移植したことを述べる。さらに「早春新^二賦葉^一 初夏細^二牙根^一」(一五・一六句)では、植物学者を思わせる緻密な描写がなされている。また「乍看^二珠顆拆^一 爭賞^二素窠翻^一」(二三・二四句)とは、突然に開花した花を見、白い「窠」、は

なのしべの散るのを賞美するという意であろうが、この表現は

実景というよりも、後から問題にする「楚辞」の表現との関係

が想起されるべきものである。ここでは保留しておく。ところで、「地疑^二星隕^一 庭似^二雪封^一 衰」(二七・二八句)では、「菊」を「星」、あるいは「雪」に見立てている。この中、「星」

に見立てる方は、「芸文類聚」「葉香草部上 菊」に引く晉の盧

湛の「菊花賦」に「浸^二三泉^一而結^レ根、晞^二九陽^一而摧^レ莖、若^二乃翠葉雲布、黃蕊星羅^一」といった例が見られる。またそれを受けて勅撰三集でも、たとえば嵯峨天皇の「経国集」卷一三「雜

言。九日翫^二菊花^一一篇」に「綠葉雲布朔風濤、紫蒼星羅南雁翔」

(一〇・一一句)とあり、また卷一の「重陽節菊花賦」に花實

星羅 莖葉雲布」(一三・一四句)と、叙述されている。ただ、

嵯峨の表現が先程確認した類書の晉盧湛「菊花賦」に全面的に

負っているのに対して、道真のは、発想の面では負いながらも、表現上はあまり類似を見出せない。かえってそのことに注意すべきではないだろうか。この道真の表現は、川口氏の注釈で説かれて^{注16}いるように、秋ではなく末でもないものの、「春秋左氏伝」魯の莊公七年の条に「夏、四月辛卯、夜恆星不^レ見。夜中星隕如雨。」（經）、また「夏、恆星不^レ見、夜明也。星隕如雨。與^レ雨偕也」（傳）^{注17}とある叙述を受けるものだろう。ただそれを通過することによって、「蒼波路」を隔つ京の都と、そこに残された「白菊園」を際立たせる効果が生じる。「左伝」のもともとの文脈では「星隕」とは隕石のことに過ぎないが、道真はそれを都と彼との間に横たわる空間的な広がり、天漢、天の河のようなものとして捉え直したのではないだろうか。

ところでこの聯での表現の新しさとして、本間氏にも指摘されているものとして、「菊」を「雪」に見立てる表現がある。^{注18}こういった「秋雪」とは、中国では文字通り、秋に降る雪のことである。この語を、道真を始めとする日本の漢詩人たちは、白菊の喩として用いているのだ。ここでは黄菊と白菊とが対にされて叙述されている様を見て採れよう。

そして「笑殺陶元亮 浪資楚屈原」（33・34句）と、陶潜の「飲酒」に「采^レ菊東籬下 悠然見^レ南山」とあるような、その生き方を否定し、屈原の「楚辭」「離騷」にある「朝飲^二木蘭之墜露^一兮 夕餐^二秋菊之落英^一」^{注19}とされる流された者に共感している。これは道真が自己の讚州左遷という状況にあって、高踏的に自らの衿持を高くして世俗社会を見下す立場にあった陶潜よりも、己の言が容れられず配流に遇い苦悩を余儀なくされた屈

原の方により多く通じるものを感じたということに他ならない。この前の聯に、「仙家嫌^二葱圃^一 隠士厭^二桃原^一」（31・32句）とあるのにも、そのことは窺える。つまり道真にとつてのあるべき隠士は「桃花原記」に描かれた「桃原」を拒絶するわけである。

次に「失^レ道人皆議 安^レ身我獨論」（53・54句）を見て行くと、ここには阿衡の紛議にあって、都から遠く離れた讚岐に身を置きながらも、節を通そうとする姿勢が「我獨」と叙述されている。ここには、彼なりの理想を貫こうとする道真の、孤かな姿を見ることができるのである。だから「含^レ情排^二客館^一 抱^レ影立^二荒村^一」（67・68句）というのも、この「情」とはよるべない孤心であり、「影」というのも一人きりの孤影であろう。そして道真の孤独感を引きずったまま詩の叙述は結末に向う。

「自閑還自落 誰見也誰言」（75・76句）では、菊が散る様が叙述される。これから想起されるのは「古今秋歌集」の巻「秋下」の業平歌「うゑしうゑば秋なき時や咲かざらむ花こそ散らめ根さへ枯れめや」とある「花こそ散らめ」とある表現だ。この「菊」が散るという表現の典拠として契沖は、「古今余材抄」で、先程33・34句で考察した「楚辭」屈原「離騷」の「朝飲^二木蘭之墜露^一兮 夕餐^二秋菊之落英^一」を指摘する。また、この「離騷」の表現をそのまま用いた日本の先行作品として、嵯峨天皇の「経国集」巻一「重陽節菊花賦」の「亦有^下鐘生杰^一 其王美 屈子食^中其落英^上」が、位相としては「鐘生」「屈子」と名をそのまま詠み込んである点で、33・34句にも近いが、挙げられよう。「楚辭」「離騷」、あるいは「経国集」「重陽節菊花賦」といった、言わ

ば生の漢詩文の表現と、業平の和歌の表現とをつなぐ媒介として、道真の詩が想定できるのではないか。道真の詩表現とは、中国の表現を日本に採り入れる、日本化する上で欠かせない謀体として捉えることができると思う。「暮景愁難_レ散 涼風恨易_レ吞」(77・78句)も、厳密に対句表現を採りながら、夕暮れの光にも「愁」、さわやかな風にも「恨み」と、道真は自己の孤愁を、それこそ手を換え品を換えて、表現している訳だ。そこにごそ思いを語る道真の試行錯誤の過程を、見て取ることができるのである。

その結果が最終聯「寄_レ詩花盛否 珍重可_レ知思」(79・80句)だと思ふ。どういふことかと言えば、故郷に問うことは、菊の花が盛りになったのかどうかと、道真は何よりも京の邸宅に残した菊叢の健在を祈っているわけである。また、後句の「珍重」は、自愛せよの意の俗語であつて、書簡、もしくは会話に用いるものであるから、故郷に残された「菊」に対する呼びかけの語と捉えられるのである。つまり道真が語つて来た孤独というものも訴え得るのは、京都の邸宅に残して来た菊のみであると、道真は叙述する訳だ。その叙述を通して己れの孤独が、表現として定位され直すという表現構造になっていると言ふことができるのである。

次に同じく巻四の「路邊殘菊」を見ておく。

路邊殘菊

菊過_二重陽_一似_レ失_レ時 相憐好是馬行遲

金精未_レ滅薰香在 欲_レ把還羞_二路拾_レ遺

この初句「重陽」を過ぎて、あたかも「失_レ時」に似た「菊」

とは、他ならぬ道真の自画像と言えらう。先程の詩では、任地の庭の菊に思いを託し、今度は路傍の菊に自らの姿を見ているのである。それと番えられている句の「馬行遲」とされる「馬」も、左遷された道真の自画像と捉えられる。また詩題となっている「殘菊」も道真の姿に重ね合わせて見ることができよう。道真は自己の孤愁を秋の景物である「殘菊」に重ね合わせることで描いて行く。その「殘菊」も未だ衰えず香りが残っていた。それを摘もうとするのも「羞_二路拾_レ遺」とされている。川口氏の注釈では「路上に落ちていた金を拾うような後めたい気がした」と「金」が落ちているとする。ただ、これを「金精」、「菊花」が散っていると叙述されていると見ることができると思ふ。つまりこれも先程問題にした「菊」が散るといふ表現の用例たり得る箇所ではないだろうか。

それでは次に同じく巻四の「官舎前播_二菊苗_一」を見て行く

官舎前播_二菊苗_一

少年愛_レ菊老逾加 公館堂前數畝斜

去歲占_レ黃移_二野種_一 此春問_レ白乞_二僧家_一

乾枯便蔭庭中樹 令潤爭堆雨後沙

珍_三重秋風無_二缺損_一 如_二何_レ廊水岸頭花_一

その題「官舎前播_二菊苗_一」から「古今和歌集」「秋下」の業平

歌「植_多し植_多ば秋なき時や咲かざらむ花こそ散らめ根さへ枯れめや」の「植_多し植_多ば」が想起される。ただここでは道真の菊に対する嗜好が並々ではなかったことが窺える。それは初句「少年愛_レ菊老逾加」から典型的に現れている。二句では「菊」を植えた「畝」が斜面にあることまで細述し、三句・四句で「去

歳」と「今春」と、つまり去年と今年の春という二つの過去を対称的に描いている。さらに「占_レ黄_レ」、「問_レ白_レ」と厳密に色対を為しながら、「野種」を移したり、「僧家」に求めたりするといった、菊の苗の入手経緯が語られる。そして五・六句では日照りを怖れて「庭中樹」がおおつとか、逆に雨の多い時にはうねの沙(砂)を高くするとかいった、あたかも菊の栽培の技術を叙している趣きすら、看取できるのである。しかしそれも終りの聯、七・八句で、「秋風」が吹いたとしても「缺損」のないことが希われ、「麗水」の菊にも劣らぬ美しさであると称揚されるまでに到る。ところでこの「麗水」を確認しておく、「芸文類聚」「薬香草部上 菊」に「風俗通曰、南陽_レ鄆_レ縣有_二甘谷_一、谷水甘美、云_二其山上大有_レ菊、水從_二山上_一流下、得_二其滋液_一、谷中有_二三十餘家_一、不_レ復穿_レ井、悉飲_二此水_一、上壽百_二三四十_一、中百餘、下七八十者、名_二之大天_一、菊華輕_レ身益_レ氣故也……」とあるのを踏まえるものだ。ここでの叙述は「風俗通」に言うような「南陽鄆縣」の菊と自己の「官舎前」に植えた「菊苗」を並列させることで、後者の優越性を語っているのである。つまりここでは「風俗通」の表現を下敷きにすることで、道真自身の「菊」に対する愛情を語って、詩全体をまとめあげている訳だ。

この詩では、道真の「菊」への嗜好、偏愛といつてもよいかもしれないが、見ることでできたのだが、それは何故生じたかも考えてみなくてはならない。そこで想起されるのは讃州への赴任という道真個有的の状況であろう。道真を「梅」の詩人としてよりも、「菊」の詩人として捉えるべきだという幸田露伴の

提言^生が想起されるのは言うまでもない。先程見た「寄_二白菊_一四十韻」の中で官から身を引き隠遁した陶潜が泛められ、政争に敗北して放浪した屈原が讃えられていたことが思い起こされる。つまりここでの「菊」の表現とは、政治と切つても切り離せない関係にある。道真にとつて「菊」とは、道真がそうあるべきと信じた処世、政治理念を体現した景物だったのでないだろうか。

次に巻四「冬夜有感、簡_二藤司馬_一」に論を移すことにする。

冬夜有感、簡_二藤司馬_一

霜籬數歩菊花殘 更有_二何人比_レ目看_一

送_二却孤帆_一煙水遠 知_二君獨臥夜衣寒_一

この詩を送った「藤司馬」なる人物は、同じく巻四で後出する「訓_二藤六司馬幽閑之作_一、次_二本韻_一」に出る「藤六司馬」のことである。後出の方でも「客舎因_レ君暫ト_レ隣、閨中夜々見無_レ人」とあるように、館を定めるのに隣として、一人住いの寂しさを共有していた、配流先での数少い友だったと考えられる。

初句の「霜籬數歩菊花殘」であるが、この「霜籬」というのは、実景であるとともに、前出した陶潜の「飲酒五首」の二、「采_レ菊東籬下 悠然看_二南山_一」の「東籬」との脈絡を見て採れるのではないだろうか。陶潜は確かに道真に眨泛められはいたが、これは先行する中国詩文の典拠としては、看過できないものである。第二句「更有_二何人比_レ目看_一」というのは、この「菊」を「看」るものが、自分以外には「何人」たりともあり得ないということ、反語的に述べたもの。そこに感じられるのは、道真の「菊」に対する並々ならぬ思い入れであり、愛情

である。そして次の三・四句「送却孤帆一煙水遠 知君獨臥夜衣寒」では、「孤」と「獨」とが対応させられている様は見えて採れる。第三句は単に叙景とも考えられるが、この「孤帆」、川口氏の訳に拠れば「ぼつりと一つの白帆のかけ」というのは、偽らざる道真自身の孤独な姿と捉えられる。ここで想起されるのは「古今和歌集」巻九、「羈旅」の小野篁「わたの原八十島かけて漕ぎ出ぬと人には告げよ海人の釣舟」が、海上を漕ぎ行く孤独感を詠じている点である。道真の詩とはこのような和歌表現の萌芽の場としても捉えられよう。やや逸脱したが、結局で「君獨臥夜衣寒」と、相手の孤独をも叙述するのであるが、そうすることで道真は自己の救いような孤を、かえって鮮明に描写しているのである。

次に同じく辺地にあつて友に送った作を見て行く。卷四「感二白菊花一、奉レ呈二尚書平右丞一」である。

感二白菊花一、奉レ呈二尚書平右丞一

不レ見花來一二年 霜風計出白銀錢

牛羊踐盡纒遺種 蜂蝨刺殘未レ落鮮

感レ昔三千門下客

予爲博士一、毎レ年季秋、大學諸生、賞_レ翫 此花一

吟_レ新四_レ百字中篇

到_レ州三年、成_二五言冊韻詩一、寄_二此花一、以引_二客中之幽憤一

故人知_レ我多_二芳意一 所以孤叢望_レ費_レ鞭

この「尚書平右尚」とは右中弁平季長だ。菅家廊下の門下生であろう。道真は、その門下生にここまで心情を吐露しているのだ。何をどう述べているのかを見て行こう。「不_レ見花來一二年

年、露風計白銀錢」(初・二句)では、白菊を銀貨に例えて、秋風が吹く様子を、錢の勘定をすると機智に訴えたものであろう。ただそこでも「一二年」という時間が導入されていることに注意しておかなくてはならない。「感_レ昔三千門下客 吟_レ新四_レ百字中篇」(五・六句)では、「昔」と「新」とを対照させることで、時間の推移を詠ぜられていないだろうか。また、ここでは「菊」が道真の過去の思い出と、分ち難く結ばれている様を見て取ることができるのである。それは「感_レ昔三千門下客」につけられた自註の箇所にも、典型的に顕われている。それによると道真にとつての「昔」とは、「博士時」であり、菊を見ると「菊」との拘りが説明される。また「吟_レ新四_レ百字中篇」とは、自註で明らかにするように、先程見た「寄_二白菊一、四十韻」のことだ。そして註でさらに、「寄_二此花一、以引_二客中之幽憤一」として注目がされる。つまり道真は「此花」、「白菊」という景物で、自己の思いを語っているのである。「寄_二白菊一、四十韻」に於て、まったく新しい景物である「菊」の叙述が、道真によつて試みられたのだが、その試行錯誤の過程とは、一面では道真の自身の悲惨な状況に対する心遣りであったと言えよう。結局で「孤叢」とされるが、これは単なる景物の描写というよりも、道真の孤独な心情の投影なのである。

五

次の詩を見て行く。今見た「感_二白菊花一、奉_レ呈_二尚書平右丞一」に後続する詩だ。「霜菊詩」である。

霜菊詩 同日序、并未見

霜氣凝^二菊墮^一 烈采帶^二寒霜^一

結取^三危色^一 船將^二五美香^一

逼^レ簾金碎^レ鍊 依^レ砌霽穿^レ霏

時報^二豊山警^一 風傳^二麗水芳^一

似^三星籠^二薄霧^一 同^三粉映^二殘粧^一

戴^レ白知^二貞節^一 深^レ秋不^レ畏涼

これと同じに賦された賦とその序があるが、今回は触れず別稿に委ねることにする。「霜氣凝^二菊墮^一」 烈采帶^二寒霜^一（初二句）とは、霜の降りた菊を詠じたものである。ここで詠まれているのは、黄菊であるが、霜との関連で「古今集」巻五「秋歌下」、凡河内躬恒の「心あてに折らばや折らむ初霜のおきまどはせるしらぎくの花」を想起できると思う。そしてその霜を帯びた菊を、「似^三星籠^二薄霧^一」 同^三粉映^二殘粧^一（九・一〇句）と、「星」、「粉」に例える。この中で「星」の比喩に「菊」を用いた例は以前見た。それは「寄^二白菊^一 四十韻」の「地疑^二星韻^一」宋 庭似^二雪封^一哀（二七・二八句）だ。中国の典拠、及びそれを踏まえた前代の嵯峨朝の表現に関しては、その折に確認したので再説はしないが、この「菊」を星に見立てる技法が、和歌の表現に採り込まれていることは、既に小島憲之氏の指摘にある。和歌の例だが挙げておく。

A 大空をとりかへすとも聞かなくに星かと思ゆる秋の菊かな

〔新撰万葉集〕 卷之下

（大虚緒取返鞠開那国星歎砥見留秋之菊鉤（詩）庭前芝草悉将落 大都尋路千里術）

B 久方の雲の上にて見る菊は天つ星とぞ韻たれける（古今集）

卷五・秋下、藤原敏行

（詞書）寛平御時、菊の花をよませたまうける（左注）この

うたは、まだ殿上ゆるされざりける時にめしあげられてつか

うまつれるとなん

C 今日ひきて雲居に移す菊の花天つ星とや明日からは見む（延

喜十三年十月内裏歌会）

（左、白雲のうへにし移る菊なればいたくを匂へ花をみるべ

く）

といった例が、その早いものだが、ここで注目すべきことがある。それは漢詩の表現が和歌の表現に移入される際に、漢詩の持つ文学的性格と思想的性格との中で、思想性は払拭されて、文学性のみを採り入れる、つまり、漢詩的発想のみで、その背景をなす思想は捨て去るのが一般であるのに対して、この「菊」を「星」に見立てる表現が、例外となっていることである。それはAでは、それほどではないが、「大空をとりかへす」と詠むことで、広大な天を象徴させる菊叢を表現し得ている。ただこうした表現は、和歌よりも漢詩に、よく見受けられるものである。Bでは「雲の上にて見る菊」と菊花を捉えている。この「雲の上の」というのが、宮中を示すとも読める言葉であることに注意しておかなくてはならない。Cでは「今日ひきて雲井に移す菊」と叙述する。この「雲井」というのが、Bの「雲の上」とともに、宮中の比喩と読めることから、その「天つ星」とさされている「菊」が、天皇の象徴ともなり得るのだ。また「今日」「明日」という時間の推移が導入されていることも見落せない。

つまりB及びCでは、「星」が、天皇の象徴として詠まれており、そのことは前に確認した嵯峨天皇の表現する「菊」と対応するものであろう。ただ道真では、そうした本来帝王の讚美につながる文脈を、まったく個人のための脈絡に置き換えてしまっているのだ。そのことには注意しておかなくてはならない。また「霜菊詩」にもどって、「戴_レ白知_二貞節_一 深秋不_レ畏_レ涼」（一・一二句）を見て行く。ここでは今までしばしば繰り返されてきた、霜を受けた菊に、「貞節」という徳目を、道真は見出し、霜を受けた菊に、「貞節」という徳目を、道真は見出し、秋が深まって「不_レ畏_レ涼」、寒さを怖れない菊というのは、景物の一つというよりも、むしろ道真自身の理想を投影した、あるべき自画像に他ならない。道真にとって「菊」とは、それほどまでに重要な景物、いや理想とするべきあるべき政道、政治思想の象徴だったのではないだろうか。

六

今まで述べてきたことをまとめておこう。道真に詠まれた「菊」を通覧することで、まず第一に、「菊」という景物が道真の政治思想と、つまり天子の徳という観念と密接に絡んでいた様相を見ることができた。そのような道真の在り方は、同時代の他の詩人たちよりもむしろ、前代の嵯峨朝の文章経国思想と、より近いものを持っていたのではないだろうか。道真にとって、左遷の時代である讃州での数年間は、勅撰三集のことばと発想、すなわち君臣和楽が、それこそ唯一の支えだったと思う。讃州で沈倫する道真にとつて、あるべき帝王と臣下の拘わりとは何

か、ということとはそれこそ切実な問題だった筈だ。それへの回答となったのが、嵯峨天皇を始めとする文学集団の、応刺奉和という賦詩の在り方だったのではないだろうか。

次に第二として和歌の素材としての「菊」の特殊性を確認することができた。「菊」を「星」に見立てる表現には、漢詩表現が和歌に詠まれる際に、しばしば閑却される思想性が、濃厚に残っている。それは「菊」の背景に、天皇の象徴を見るものだった。さらに言えば「菊」が散るといふ葉平の表現の背後に、道真の詩句を介在させた上で、「楚辞」屈原の「離騷」の投影を見ることができないか。つまり「菊」の表現とは、それこそ中国詩文の表現、さらにはそれを受容した勅撰三集、及び菅原道真の表現の試行錯誤に拠る点が大きかったと言えると思う。

今回は、道真の「菊」全体、特に巻三の用例、また道真の同時代の他の詩人の表現との差異、及び勅撰三集が道真の「菊」の表現に及した影響までは論じきれなかったが、これらに関しては、いずれ稿を改めて論じ直す予定である。

注1 「菊」は例えば『万葉集』に用例を見ない。

2 幸田露伴「梅と菊と菅公」と「露伴全集十九」（昭26・12、岩波書店刊、初出は「新日本」一号、明44・4）

3 本間洋一氏「菅原道真の菊の詩について」『東洋文化』（二八九号、昭和60・8）

4 坂本太郎氏「讃岐守の四年間」『菅原道真』（昭37・11、吉川弘文館刊）

- 5 本文は川口久雄氏校注の『日本古典文学大系七二卷
菅家文章・後集』（昭41・10、岩波書店刊）に拠る。た
だし訓み下しは私にした。以下同様である。
- 6 『芸文類聚』（一九六五・8、中華書局上海古籍出版社
刊）
- 7 『史記』の当該本文は吉田賢抗氏校注の『新釈漢文大系
八七 史記七（世家下）』（昭57・2、明治書院刊）に
拠る。
- 8 陶潜の詩の本文は『靖節先生集』（中華民國75・2、台
湾中華書局刊）に拠る。
- 9 注5の40→41頁参照。
- 10 注5の316頁参照。
- 11 李白の詩の本文は平岡武夫氏編『李白の作品 資料唐代
研究のしおり九』（昭60・9、同朋社刊）に拠る。
- 12 大野實之助氏『李太白詩歌全解』（昭55・5、早稻田大
学出版部刊）の122頁参照。
- 13 『経国集』の当該詩の本文は小島憲之氏校注の『国風暗
黒時代の文学 中（下） I』（昭60・5、塙書房刊）に
拠る。
- 14 『経国集』の当該詩の本文は小島憲之氏校注の『上代日
本文学与中国文学（下）』（昭40・3、塙書房刊）に拠
る。
- 15 注13に同じ。
- 16 注5の690頁参照。
- 17 『春秋左氏伝』の本文は竹内照夫氏校注の『全釈漢文大
系四卷 春秋左氏伝 上』（昭49・2、集英社刊）に拠
る。
- 18 注3の本間論文。
- 19 『楚辞』の本文は星川清孝氏校注の『新釈漢文大系三四
楚辞』に拠る。
- 20 注5の323頁参照。
- 21 注2の幸田論文。
- 22 注5の349→350頁参照。
- 23 注14の1826→1827頁参照。

（本学専任講師）